

第2部＜実践報告＞
＜報告1＞

静岡県立浜松江之島高校での
ピア・サポート・トレーニングの実践
—誰もが行きたくなる安心・安全な学校作りのために—

山口権治
浜松市教育委員会

みなさんこんにちは。浜松市教育委員会の山口です。3月まで浜松江之島高校で英語の教員をやっていました。そこで、ピアサポートといって、高校生をトレーニングして、小学校中学校へ出前授業をして、そのなかで高校生がコミュニケーションの指導をするという活動をしてきました。浜松市は毎年1,000人くらい不登校がいて、全然減りません。ということで不登校対策として教育委員会へ呼んでいただきました。浜松市の不登校は二つに分かれていまして、一つは子供達の間関係、もう一つは保護者の不適切な養育、ということで、保護者に対してはペアレントトレーニング、子どもたちに対しては私が学校へ出向いてピアサポートをやらせていただいています。今日の話の流れですけど、不登校・いじめ、ピアサポートとは、ピアサポートの効果、などについてお話させていただきます。

先ほど土井先生が話されたように、学生も生徒も一緒です。孤立して学校が嫌になって来なくなるパターンです。高校の場合は、規則で三分の一欠席すると留年ということになっているので、ちょっと大変です。一旦不登校になってしまうと、なかなか元に戻るのが大変ということです。いじめも過去最多ということです。いじめ防止対策推進法などもあまり効果が上がっていない。特に9月1日が多いということで、昨日あたりの新聞ではいじめ自殺に関する報道がたくさんされています。

他の先生方は研究者ですが、私は実践をしてきたのでその観点からお話させていただきます。簡単に不登校とはどういうことかという、教室が嫌で、入れない子どもです。いじめは教室で起きている。日本のいじめはちょっと複雑で、8割が加害者被害者の両方を経験しています。加害者と被害者がころころ変わっていく。なので加害者だけ指導するのはある意味では対策にならないわけです。

では、対策はどうするか。私はできるだけシンプルに考えます。要は楽しい学校にすればいいじゃないか、楽しけりゃ学校来るじゃないか、ということです。じゃあ楽しい場所ってどういう場所かっていうと、困った時に助け合う良好な人間関係です。職場も同じですよ。困ったら分からないことを教えてくれる。頑張りなよって励ましてくれる。そういう環境です。では、教室をそういった環境にするのは誰ができますか？ スクールカウンセラーですか？ スクールソーシャルワーカーですか？ 違いますよね。先生にしかできないわけです。教員の仕事です。

では何をするのか。まず、個を強くする。「一次的生徒指導」です。具体的にいうと、

道徳が来年から小学校で教科化されますが、その中で僕等はピアサポートトレーニング、簡単に言えばコミュニケーションスキルをやります。全国中学校校長会でも問題になることの第一位は「子供たちが人間関係を築けない」というのが圧倒的に多いです。で、「個を強くする」の次は、互いに仲間に支えられて乗り切る力です。「二次的生徒指導」、例えば部活動ですね。熱い中キャプテンが頑張ろうぜっと励ましながらやる。頑張ろうぜっと声をかけても物理的な気温は下がりませんが、気持ち的にやるかな、という感じになる。この部分には多分協同学習も入ると思います。一緒に課題達成するために頑張る。これらは相互作用ですので並列です。集団に支えられて個が育ち、個が育つことによって集団が発展していく。こういうものですね。今ここが行われていないわけです。

2003年のPISAショックから、学習、学習ということで、アクティブラーニングとか学習の授業改善のことが重さになっています。これまでは、多分2000年代は、不登校が課題で、大河内くんのいじめがあってスクールカウンセラーが入って、そこらへんのときは、エンカウンターなどを行っていたんです。でも2003年のPISAショック以来、学習保証、学力の向上ということになって、多分来年からの新指導要領は時間数が増えると思います。

で、現在は一次・二次の指導をやっていないので雨漏りがどこどことこつとこつときている、これを、スクールカウンセラーをはじめ専門家が個別指導でやっている。だから、一次指導、二次指導をやっていないから三次の個別指導が大忙しということですね。でも、スクールカウンセラーもお金がかかり、行政はなかなかお金が出せません。だから、私がいる部署も、不登校対策なのですけども、臨床心理士が3人とか、退職した校長先生が10人とかいます。そういった人たちは個別指導です。来所相談と電話相談ですね。

私だけです、一次・二次にまわっているのは。今年から私をこのポストにつけている。なぜかという、なった子をケアしても数は減りません。なった子に対しては非常に相談活動が充実している。カウンセラーも。でも、減らすためには不登校にならないように、一次・二次のところをケアしないと。だからそこをなんとかしようとする、なかなかやる人がいないということで、山口先生、これまでやってきたから手伝ってくれないかと教育委員会のお声がかかったわけです。

これは愛知県の4,000人のデータですが、暇な時に何をしていますか、という調査です。どうでしょうか。75%は人と会ってない。コミュニケーションをとってないわけだから、コミュニケーション能力が上がるはずがない。だからコミュニケーション能力を上げるにはコミュニケーションを取らせなければだめです。でもその場所がない。安心して自己表現できる場所がない。「直接人と会ってる」という子は2割くらいです。

こちらは内閣府の若者意識調査、ひきこもりの原因です。これは市や町の申告による調査ですから、ひきこもっていると申告しても何もいいことがないので、しない。で、母数が少ないですが、実際は、ひきこもりの人は、2010年、7年前でも推定70万と言われていました。若者の定義は40歳未満なので、39歳までです。ひきこもりになったきっかけは、不登校が11.9%。大学を含めても13%いません。じゃあどういう子がひきこもりになったのか。「職場に馴染めなかった」が23.7%。就活がうまくいかなかった、受けても受けても受からない、これらを合わせて44%です。この子たちは学校生活をスルーしてきた、何も問題なく通ってきた子たちです。でも実際、ひきこもっているきっかけは職場の人間

関係と、支えてくれる人間関係の不足。やっぱり孤立しているということです。この子たちは不登校経験がなくて、学校生活を普通に送ってきたわけだけけれど、「生きる力」にはやはりつながってない。だから全ての生徒に他者と「つながる」力を育てて問題解決できるようにするのがいいわけです。アクティブラーニングもそこからきていると思う。

ではどうするか、というと、具体的には「つながる」というのがキーワードですので、人を助けて人となつがって成長する。人に助けられて人となつがって成長する。共に楽しいことをしたり問題解決をして人となつがって成長する。だから部活動とか協同学習、共に協力して課題を達成するということです。

ピアサポートというのは、要は助け合いましょうよ、ということです。学校の中で、「思いやり」の心がある、行動のできる子を増やしましょうよということです。困っていたら声をかける、寅さんみたいな人を増やしましょう、おせっかいを増やしましょう、そういう活動です。

さっき土井先生のお話にもありましたが、高校生は76%が相談相手は友達です。それから、人の役に立ちたいと思っている中学生は94%となっています。だから、ピアサポート活動の定義ですが、社会の変化、例えばさっきのデータのようにインターネットとかやって人と関わらない子が75%いる、そういう生きる力、自己表現や対人関係能力、要は社会性が欠如している中で、家庭では貧困や虐待、地域も関わらなくなった。じゃあ、学校で先生の指導を基に、コミュニケーション力を高めて、それを使って人を助ける活動をしようじゃないか、ということです。昔は、ほっといても子どもは育った。地域とか三世帯家庭があったから。今は意図的計画的にこういうことをやらないと子どもは育たない、ということです。

ピアサポートはトレーニングとサポート活動の二つに分かれています。トレーニングでは友達との問題解決を行う。ブリーフセラピーを使いますが、もめごとを仲裁するスキルを教える。これがやってる風景です。このピアサポートを行政がトップダウンでやっているところは岡山県の総社市というところなんです。6年前に始めました。不登校出現率が3.63%から1.61%まで減りました。もっとすごいのは中学生の検挙率です。始める前は205件です。平成27年は7件になりました。こちらは新潟県です。保健室の来談者数のがくっと減りました。教室が嫌だとか不安だから教室に入れない、という子たちが格段に減った。つまり不定愁訴の児童が減ります。だから養護教諭の先生は「この子は個別の指導が必要だ」というときには十分に時間が取れる、という風におっしゃっています。

まとめますと、人を助けて人に助けられて、共に楽しいことをして、人となつがって成長する。そんな活動を通して、「おせっかい」の子、健康なパーソナリティを持った生徒を育成する。そして、子どもの問題は子どもで解決させる。昔は「子どものけんかに大人が口を出すな」という言葉があったように、いじめとかは自分たちで解決していたわけです。そういうスキル、昔できたことを、なぜできないか。育ってないからです。環境が変わって。だから学校できちっと教えてできるようにしましょうということです。

保護者もそうです。保護者のクレーム対応はPTAがやってほしい。もめごとの仲裁です。保護者のクレームに先生が出ていけば火に油です。僕は教育委員会にいますけど、もう謝るしかないわけです。なんか言えば火に油ですから、サンドバッグ状態になります。サンドバッグ状態になった先生が教育に意欲をもって取り組めるか。無理ですね。早く転

勤したい，という話になります。でもそれぞれの中で問題解決ができれば，今ブラックとか言われている教師の負荷も減ります。

だから，教師を加配してもらうのが一番いいですよ。でもお金ないから絶対できません。では今の現状でどうするかといえば，使える生徒を使いましょうよ，ということです。先生は先生にしかできないこと，例えばどういうクラスにしたのか，どういう力を付けさせたいのか，僕は英語教師なので，英語を楽しく教えるにはどういう工夫をしたらいいか，そういうことに集中したいわけです。そういうことが今は生徒指導とかクレーム対応でできていない。だからピアサポートは生徒よし，教師よし，保護者よし，三方よしで，お金はかからない。ということで，いいやり方ではないかと思います。どうもご清聴ありがとうございました。

次年度教育学会第10回大会 シンポジウム(2017.9.6)

良好な人間関係を構築する ピア・サポート

上級教育カウンセラー・学校カウンセラー・産業カウンセラー
ピア・サポートコーディネーター
浜松市教育委員会
教育総合支援センター
山口 権治



1

本日のプレゼンテーションの流れ

不登校・いじめの現状と対策
ピア・サポートとは
なぜピア・サポートなのか
ピア・サポートの効果

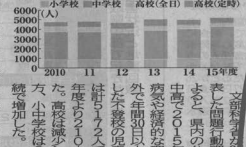
2

平成28年 10月28日
(金曜日) 静岡新聞朝刊

2016年10月28日(金曜日) B (32)

15年度、県内公立小中生 不登校3年連続増

県内公立学校の不登校児童・生徒数の推移
小学校 中学校 高校(全日) 高校(定時)



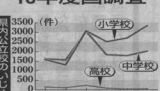
文部科学省が発表した調査によると、15年度は、県内公立の小・中学校で、不登校の児童・生徒が、前年度に比べて、それぞれ、1.1倍、1.2倍、1.3倍に増加した。また、県内の公立高校でも、不登校の生徒が、前年度に比べて、1.1倍に増加した。県教委は、この増加を、いじめや学習意欲の低下、家庭環境の変化などが要因として挙げている。また、県教委は、不登校の児童・生徒の増加を、学校の先生や保護者の協力によって、早期に発見し、対応することを目指している。また、県教委は、不登校の児童・生徒の増加を、学校の先生や保護者の協力によって、早期に発見し、対応することを目指している。

3

平成28年2016年
10月28日(金曜日)
静岡新聞朝刊

県内小学校いじめ最多 中学も増 規範意識の低下懸念

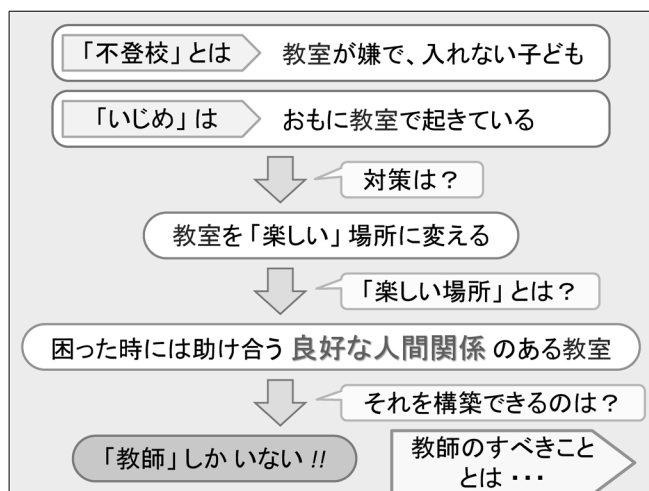
15年度国調査



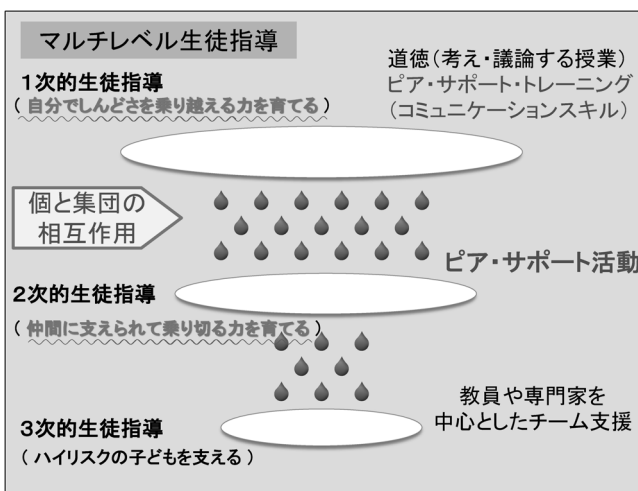
文部科学省が発表した調査によると、15年度は、県内公立の小・中学校で、いじめの被害を受けた児童・生徒が、前年度に比べて、それぞれ、1.1倍、1.2倍に増加した。また、県内の公立高校でも、いじめの被害を受けた生徒が、前年度に比べて、1.1倍に増加した。県教委は、この増加を、規範意識の低下や、いじめの被害を受けた児童・生徒の増加が要因として挙げている。また、県教委は、いじめの被害を受けた児童・生徒の増加を、学校の先生や保護者の協力によって、早期に発見し、対応することを目指している。

現状の
いじめ・不登校対策は、
効果が上がっていない

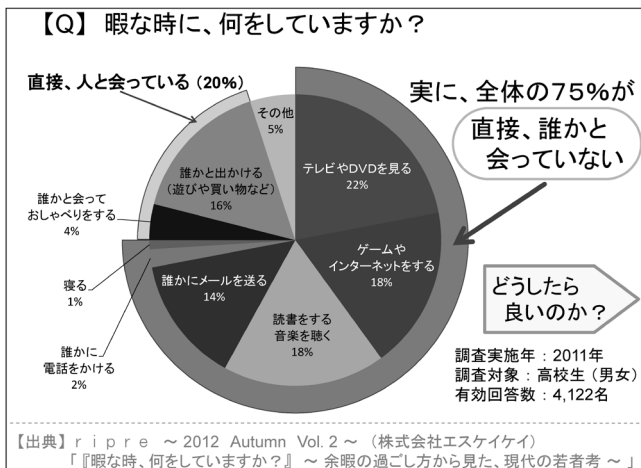
4



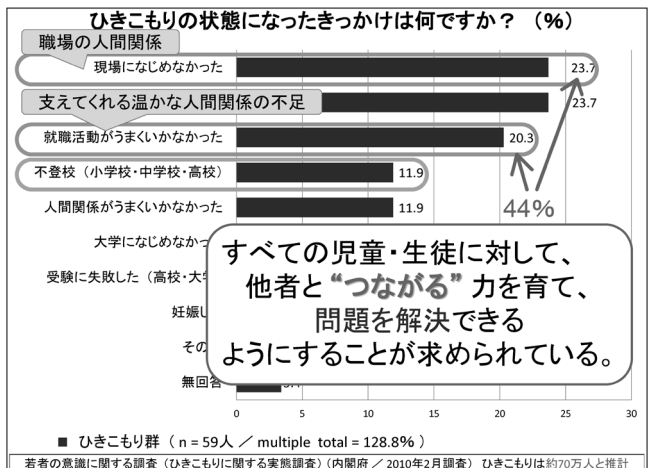
5



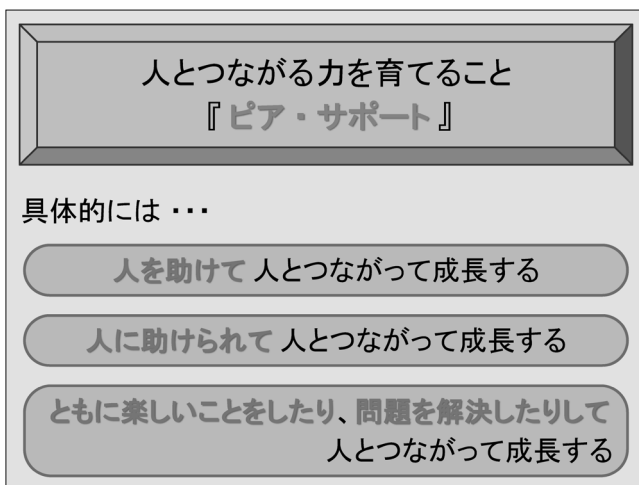
6



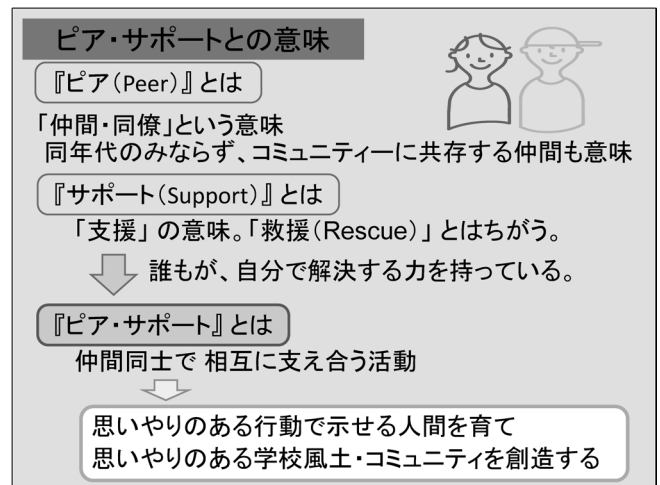
7



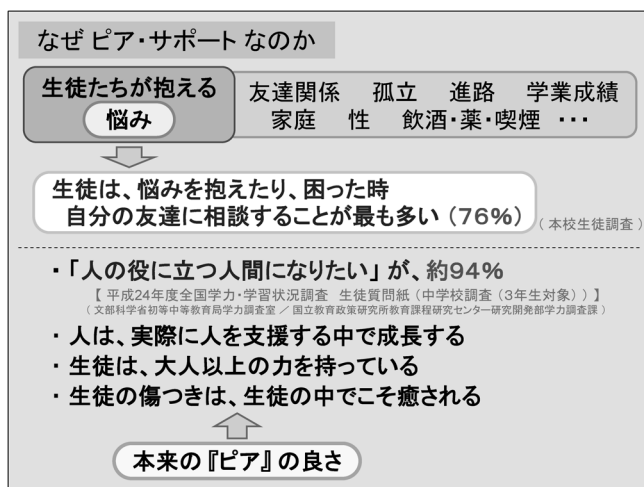
8



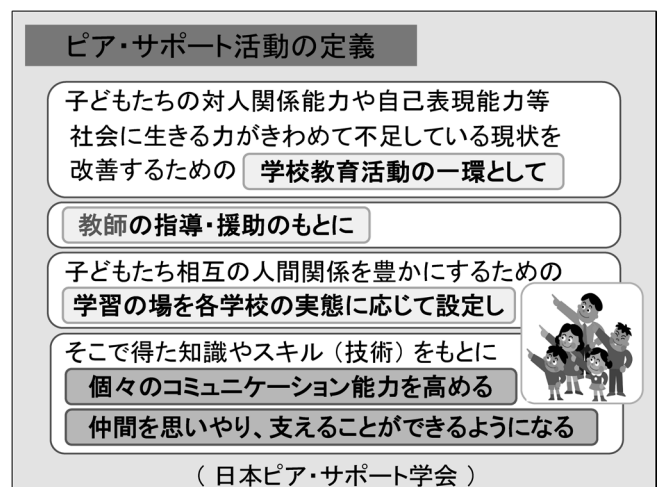
9



10



11



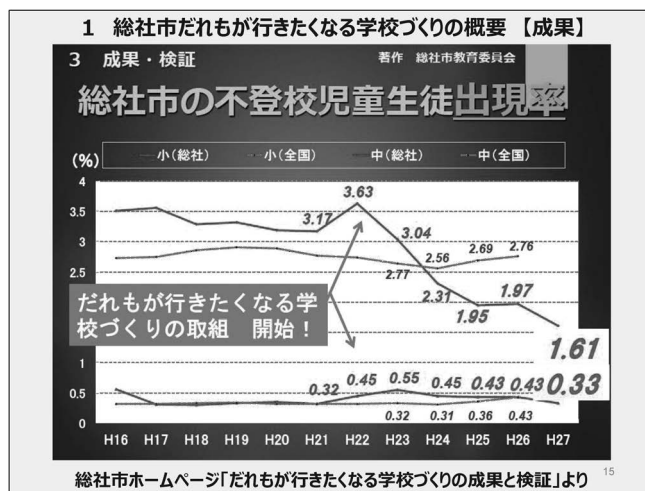
12



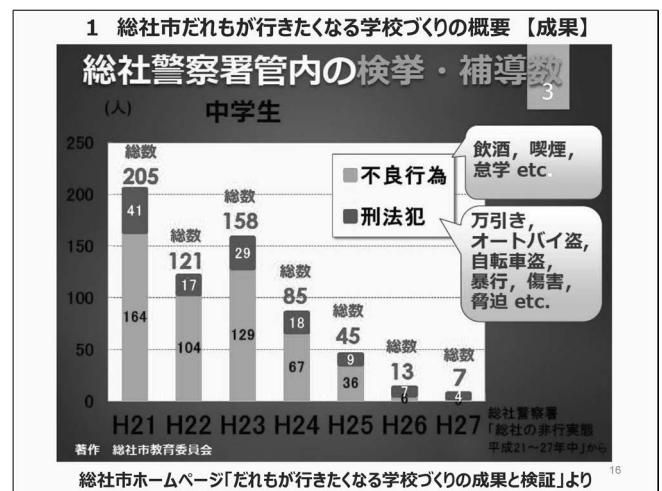
13



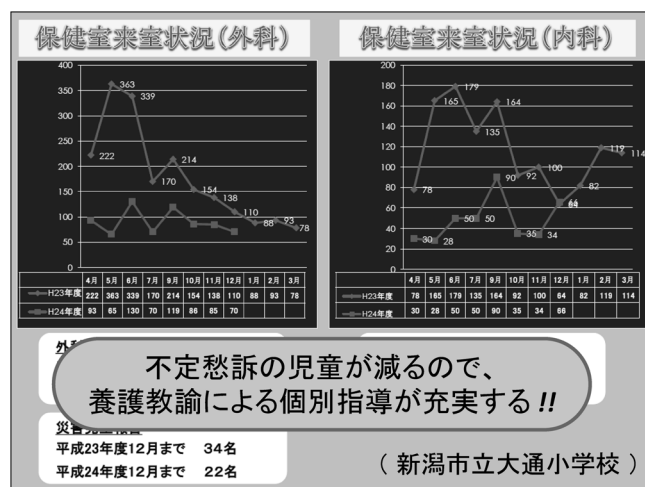
14



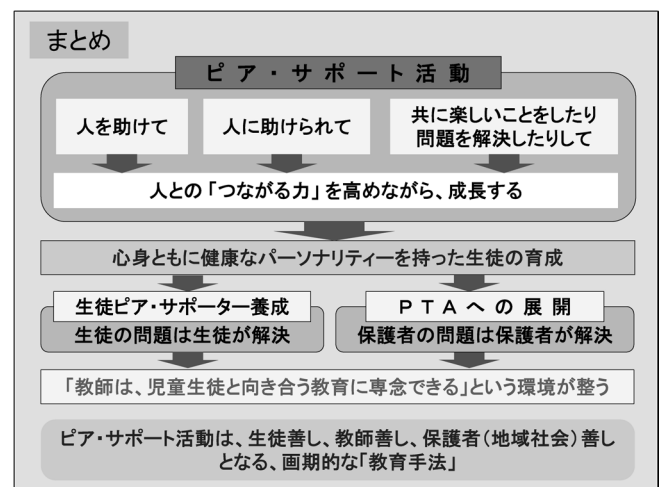
15



16



17



18

プレゼンの要点

不登校やいじめ問題を、児童生徒が自分の
問題として捉え、解決する力を育てる

そのためには、研修によって
教師の力量を向上する

効果を高める為に、トレーニングを受けた
大学生を活用する。大学生がミニ教師に
なることで、児童生徒のロールモデルとなり
両者の意欲が向上する

19

ご静聴ありがとうございました。



お問い合わせ

natural_green_bird@eco.ocn.ne.jp

20